虹 弾くことを諦めない

⑯1 東大卒ピアノ奏者の回り道

ピアノを奏でる本荘さん＝京都市内

大切な日の前夜はいつも眠れない。入試も、コンクールも、演奏会も。緊張を強いられるビッグイベントを目前にすると、本荘悠亜（ほんじょうゆうあ）さん(26)＝富山市＝は高ぶる気持ちを抑えられない。８月半ば、京都市内でのコンサートの際も、一晩中目がさえていた。「音楽が頭の中にずっと流れちゃうんですよ」

「ピアノ奏者」を名乗り、桐朋学園大学院大学（富山市）で腕を磨いている。「『ピアニスト』と言ってしまうと、大げさな意味が付いてしまう。ピアノ奏者はピアノを演奏する人。それは嘘ではないから」

コンサートでは、中学校の同級生だったソプラノ歌手と共演した。50席ほどの小さな会場は満席になった。この日の本編はベートーベンのピアノソナタ第32番で締めくくった。ベートーベンのピアノソナタの中でも最上級の難易度で、30分近い長尺の曲。少しのミスはあったが、細部にまで感情を込めて弾き切った。「今日は55点かな。まだまだです」。自己採点はいつも厳しい。でも、少しずつ点数は上がっている。

◇

滋賀県出身。ピアノを始めたのは３歳で、左利きを矯正するためだった。上達は速かったが、音楽を続けるには何かとお金がかかる。親はタイミングを見計らい、本人に続けるかどうかを確認したが、鍵盤から手を離そうとしなかった。「一つコンクールが終わってもすぐに次がある。やめさせるチャンスがなかった」と母の育子（いくこ）さん(63)は言う。結局、左利きは直らなかった。

指導者の勧めもあって、本荘家はグランドピアノを奮発して買った。本荘さんは学校から家に帰れば、何をするでもなくピアノを触った。小学校４年生で、６年生も出場する大会で優勝し、県知事賞をもらった。「人生で一番輝いていた」と振り返る。

才能を見込まれ、小学生ながら大阪の大学教授のレッスンを受けることになった。滋賀の自宅から片道１時間かけ、電車で通った。しかし、コンクールで勝てなくなった。今思えば、レッスンが合っていなかった。技術や体の使い方よりも、演奏の自主性を重視する指導だった。「小さい時なら小器用なだけでいけるんです。でも、いつまでもそうはいかない」と自己分析する。

中学校でもピアノは伸び悩んだ。しかし、学校の成績は良かった。模試を受ければ、県内トップクラス。滋賀から兵庫に越境し、全国的にも有名な灘高校に進学した。

高校進学を機にピアノをやめる人は少なくないが、本荘さんは続けた。長くピアノをやっていれば、コンクールで争う人たちとは友人になる。その縁を大切にしたかった。それに「下手すぎて、まだやめられない」という思いもあった。一方で、「こう弾きたい」というイメージはしっかりある。何か手がかりがあれば、たどり着ける予感もあった。しかし、10代の登竜門的なコンクールでは、予選敗退が続いた。

灘高は学年の半数近くが東大に進む。本荘さんも東大に入った。一人暮らしの部屋にもグランドピアノを持ち込んだ。８畳ほどの狭い部屋で、寝るときはピアノの下に布団を敷いた。コンクールへの挑戦は地道に続けていた。プロになりたいという強い気持ちがあったわけではないが、どうしてもピアノからは離れられない。

大学のピアノサークルの同級生には、後にショパンコンクールでセミファイナリストになり、ＹｏｕＴｕｂｅｒとしても活躍する角野隼斗（すみのはやと）さんがいた。ピアノ関係者の間では、以前から一目を置かれる存在だった。才能の塊のような同級生を横目に見ながら、ピアノ以外にも打ち込めることを徐々に探そうとした。合唱の指導にも関わったし、スタートアップ企業のインターンにもチャレンジした。でも、どれもしっくりこなかった。

◇

就職をきっかけにピアノへの思いを断ち切ろうとした。有名企業のグループ会社に入り、企画営業を担当した。しかし、毎日のようにミスを連発した。目の前の仕事にばかり打ち込み、活気がない先輩社員に不安を覚えた。「ここにずっといると、自分もああなるのか」とぞっとした。気がつくと、涙がこぼれるようになった。部屋のピアノのふたは、しばらく閉じたままだった。

入社１年も経たずに退職を決めた。幸い、ピアノ仲間から音楽関係の会社を紹介された。コンクールを主催する会社だった。職場に溶け込み、気持ちに余裕ができた。久しぶりにピアノと向き合いたくなった。

ピアニストの黒木洋平（くろきようへい）さん(33)の存在を知った。指だけでなく、体全体を使って弾く奏法を指導する人物だった。音には、足首や股関節の力の入れ具合まで影響するという。興味を持ち、教室の門を叩いた。

黒木さんは本荘さんの演奏を一聴して感心した。「音大で学んでいてもおかしくない実力はあった。テクニックや完成度は研ぎ澄まされている。でも、それが表現に結び付かない。音から歯がゆさが伝わってきた」

黒木さんのアドバイスを受けると、音色が変わった。音を濁らせずとも、強く響かせられる。「探していたパズルのピースが見つかった」。一気に道が開けた気がした。

ピアノをもっと学びたくなった。音楽を中心に据えた生活に、まだ未練があった。「けりをつけるなら今」と思い切った。仕事を辞め、音楽系の大学院に進むことにした。物欲はないし、お金がかかる趣味もない。親には「溶けるほど同じ服を着ている」と言われるほどだ。会社ではウェブ関係の仕事もやっていたから、その知識を生かせば生活はなんとかなる。

海外留学を考えたが、時代はコロナ禍を迎えていた。国内に視線を移し、富山の桐朋学園大学院大学を見つけた。演奏の実技に特化した授業内容が気に入った。学期末の試験では、60分という長い演奏プログラムが課される。演奏家を目指す学生には、実践的な内容だった。寮から学校が近く、音楽に打ち込める環境も良かった。

あるオーディションに合格した。滋賀県ゆかりの若手音楽家に初めてのリサイタルの機会を提供するというものだった。ホールは実家から徒歩で行ける距離にあった。「憧れの甲子園」のような存在として、ずっと見上げていた。

やはり眠れぬまま、300人以上の聴衆で埋め尽くされた会場のステージに立った。富山で組み立てたプログラムを披露した。軸にしたのは、20世紀初頭に活躍したシマノフスキの難曲。緻密な演奏が求められる。今の本荘さんだから挑戦できる曲だった。

行く末を心配する両親が客席にいた。母は「頑張ったね」と言ってくれた。父は「トークが良かった」と演奏ではなく、曲間の解説をほめた。昔から照れ屋な父だった。

◇

大学院を修了したら、自分のピアノ教室を開く。回り道をして、自分の音を見つけたからこそ、伸び悩む人にアドバイスできる気がしている。「僕は失敗の連続で、無駄な努力をしてきた。最短距離の道のりを示してあげたい」

もちろん演奏活動も続ける。師である黒木さんは「ただ暗い、ただ明るいだけの表情ではない。官能的な、文学的な響きがある」と評してくれる。

コンクールで勝ちたかったのは、演奏に自信を持てなかったから。自分の代わりに、誰かに認めてもらいたかった。今はイメージに近い演奏ができる。無理に競い合う必要はない。納得できる音楽を誰かと共有できれば、それでいい。聞いてくれる人の存在も力になる。人前で演奏するのが、以前よりも気持ちいい。「ピアノは僕にとって永遠に試行錯誤できるおもちゃ。この楽しさを分かち合いたい」

大きな会場を一杯にするミュージシャンがいますが、小さな会場で生の音を届けてくれる本荘さんのような存在は貴重です。音楽を身近に感じさせてくれます。本荘さんは演奏曲の解説も大切にします。京都のコンサートでは、プログラムに自作の詩まで添えて、曲のイメージを伝えてくれました。クラシックの魅力を再確認できました。

「秋映」西治子

「虹」第７巻 発売中

最新刊の第７巻「虹　補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121～140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352（平日午前９時～午後５時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933―0911　高岡市あわら町13―50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX　0766－25－7773
mail　niji@kitanippon.jp

次回掲載は10月１日（土）です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局